	エ　人間の言語獲得	エ 人間の言語獲得を保障するもの ①大きな脳ー人間の脳は，類人猿の脳の約4倍のニューロンを持っている。それが，複雑微妙な音を聞き分ける能力や，発音のための筋肉をコントロールする能力を保障している。 ②社会ー人間は高い模倣能力を持っているが，それは，豊かな言語環境社会の存在を前提にして発揮される。	
	3. サルからヒトへー言語の役割 ア　人間化の瞬間 イ　本能から学習へ ウ　記号の記号 オ　反省と予測	3. ア 言語習得を可能にする脳の発達は，生後数年，特に生後1年間のそれは驚異的である。そして，7才くらいで完全な構造に達する。 イ 脳の発達と，言語の習得により，人間では相対的に本能が抑えられ，知能の発達が促進される。 ウ 人間の言語は，ほとんどすべて，その表す事物とは直接の関連が無い。そこから緊密な体系化と，無限の発展への可能性が生まれる。 オ 言語の機能を生かして，人間は，経験を蓄積し，試行錯誤を少くすることができる。	※マルクスのことば「いちばん下手な建築師がいちばん巧みなミツバチと違うところは，建築師は密蜜で巣房を作る前に頭の中でそれを作るということである。」
結論 (5分)	言語という偉大な発明	人間は，長い間にわたって，いろいろな発明発見を重ねてきた。それらに比べて「ことば」は格段にすばらしい発明だということを考えさせる。	

(10) “生きている” とは何か
ーチャップリン『街の灯』を見ながらー

川　田　基　生
山　田　雄　一

〔指導者〕 川田基生

〔日時〕

〔本時の位置〕総合学習グループでは「人間とは何か」について，植物，動物，ロボットなどとの比較をしながら考えてきた。人と動物はどこがちがうのであろうか。一般に，われわれは，人というのは心をもっており，下等動物，無生物は心をもたないと考える。しかし，そう考える根拠は何であろうか。「人はものを考えていることの証拠となる行動をする」と答えるなら，「ロボットにも心がある」となりはしないか。本時においては，この心の問題に焦点をあてて，人間が生きているってどんなことか考えてみたい。病床にあった幼いチャップリンに，貧しく医者の呼べなかった母が，「母は私の胸に，生まれてはじめての暖かい灯をともしてくれた」という話の内容紹介から授業をはじめる。9回にわたる真剣なとりくみの最後には，チャップリンの映画を見ながらの楽しい一時間を用意できないだろうか。

〔本時の目標〕人間が“生きている”ということの弁証法的性格を，チャップリンの母の生きている姿から考えてみる。逆説に満ちた人間存在というものを考えさせる。

過程	学習内容	学習指導	指導上の留意点
導入 (10分)	・ユーモアのある短い場面を2つ見せる。内容的には相矛盾する2つの行動，生徒はただ笑うだけだが伏線的に見せる。 ・病気をなおすにはどうすればよいか。前時の授業の印象的な，ひとことについて問いかける。	「街の灯」(自主編成VTR) 2場面を，3分程度見る。 前回の復習をする。	暗くして，早く集中できるようにさせる。 前回の核心部分に焦点をあわせ，前回全体を想起させる。

	• 幼いチャップリンが発熱で病床にあったときの母の話しの内容の紹介。「その夜，母はオークリイ・ストリートの暗い地階の部屋で生れてはじめて知る暖かい灯をわたしの胸にともしてくれた。その灯とは，文学や演劇に，もっとも豊かで偉大な主題を与えつづけてきたもの，すなわち愛，憐れみ，そして人間の心だった」という文脈上の「人間の心」が本時の主題であることを示す。	教師の短い物語を聞きながら本時のテーマを知る。	やわらかい口調で，一つ一つの言葉を大事にして話す。
	• ロボットやサルに心があるか質問した後，ＶＴＲを見せ，見終った後，指名して答えさせる。 • 自伝一読の後，母はなぜ「イエスは人間的な方だ」と言って，声をあげて泣いたのか。イエスの心は人の心として，なぜすぐれているのか。	• 第１回～第９回の授業で使用したＶＴＲが30秒づつ編集されたものを。「サルにも心があるか」といった質問について話し合う。 • 「チャップリン自伝」からの抜粋プリントを読む。	「比較する」論理で展開させる。 人間心理の矛盾に気づかせる。
	• 「人間の心」について各自の考えをまとめさせる。 • 「人間の心」について，教師の考えを聞かせる。	「人の心」の特色について，数行の作文をする。 母がなぜ舞台にもどらないのか，など屈折に満ちた言行の例のいくつかを知る。	自分の説の論拠をきちんと出させる。
展開（10分～）	• 本時の内容を意識させつつ，ＶＴＲを見せる。状況がゆるせば，10分以上見せたい。延長部分は，人の心についての仮説－検証意識から少しづつはなれたものに，ＶＴＲの内容をひろげておきたい。	出来れば，導入部の二場面のチャップリンのしぐさをまねしてみる。 「街の灯」（ＶＴＲ）を見る。	「矛盾」を体現させる。その直後，暗くし，対話から，自問への心情の転換を。 授業で考えたことを情感としてとらえなおしさせる。

生きている，とはどんなことか。

お菓子をたべ，テレビを見たりすること，と答えそうな生徒たちに，ヴィクトリア時代の英国の母子家庭の暮しと生き方を考えさせる。

どん底の暮しの中で，チャップリンは，母に，なぜ舞台にもどらないのかなじった。すると母は微笑をうかべて，あの世界は偽りとみせかけに満ちているので戻れば，すぐと神様のことを忘れてしまうにきまっているから，と答えた。それでも舞台の話しになると，チャップリンの母はわれを忘れて熱中してしまう。そして昔のことを思い出したあとは，何時間も口をきかず，背中を丸めて針仕事にかかる。

そんなチャップリンの母の矛盾の多い心のあり方を通して“生きている”って何かを考えてみたい。

チャップリンの母にとって，生きているってことは愛するっていうことなのだろう。愛するってことは，サルの子にもできる。しかし，人は，同時に疑いのために苦しまねばならない。そういった人の心の屈折を授業ではとらえようと試みる。

資料を読んだ生徒の感想文

もち論，「人間って矛盾に満ちている」といった，教師の注文通りの文もありますが，ここでは，教師の意図したものからズレていて，どこか新鮮で，今後のための参考になると思われるものを取りあげた。

• …貧民院での様子を書いたところは何ともいいようがない。かわいそうの一言では物足りなくて…。また反対に，シドニーがおさいふを拾った時の話はちょっとおもしろい。お母さんの頭痛がケロリと直ったのもおかしい。それにしても，日帰り旅行なんて楽しいに違いなかっただろうなと思う。チャップリンのお母さんも大たんな事をしたものだ。思い切ったことをするほうが子供達にとってはうれしかったのかもしれない。

… C女
∘…彼女が舞台の事をやっているのが，一番彼女の美しい姿，本来の姿のように思うのだ。彼女が子供らの前で演じている時は，子供達もすばらしいと思うだろう。このひとときの幸せが，彼ら親子にとって生活のささえのように思う。…彼女が舞台にもどれたとして親子のつなかりは，今の貧しい時と変わる事はないのだろうか。そう願いたい。 D女
∘チャップリンの母は，すばらしい人間であり，母であると思います。貧しい暮しの中で新鮮な心を持って…自分自身の死と共に，自分自身をみつめ，他人の心を見ぬいてしまうような，人間の前提を超えているような立派さだと感動しました。…子供の心を深く探り当て，豊かにし，子供を愛している…老けてしまった悲しい姿にも，人間らしさが満ちて，どことなく豊かさを感じるような貧民院の暮しだったのでしょう。
… E女
∘…チャップリンの母がイエスの話をチャップリンに聞かせ，涙を流し感動した気持ちが，少なくても私はわかったような気がする。何か信じられるものが，自分の心に刻まれると，本当になごやかになるのを，自分ではわかっているつもりである。… F女
∘「生きてきた」というのは苦しいことをのりこえてきた。「生きている」ということは，苦しみの中にいる。「生きていく」ということは，幸福にめぐりあおうとしている。「生きている」ということはすばらしい。この命は，自分の思いのままにあやつれる。「生きている」ということは，これから先をどうやって進んでいこうかを考えるための時間だと私は思う。
… G女

感想文について

C女D女E女の文は本筋とははなれてゆくのだが，文章を味わう感受性がおもしろいのでとりあげた。

おもしろいと思うのはなぜか。テーマが新鮮である。好きなことに熱中する快さ，豊かな創造性，人間を理解する力を示す，といったテーマ。日ごろの授業で取りあげないテーマ。

日ごろ，「君たちに欠けているのは未来への希望だ」などといいながら，私は生活の苦労ばかりを語りたがって，大人としての日々の充実を示せないでいた。大人の充実を見ない生徒が将来に希望が持てるだろうか。チャップリンの母は貧しいが充実した大人を見せていた。

私は気づかずに，こんなテーマをとりあげていたらしい。総合学習グループの多くの試行は，一見整って見える教科の分業に，意外な死角があることを示唆しているようだ。

そして最大の死角は，映画と翻訳物の小説であろう。我々は青春時代，翻訳小説と映画から，人生について，多くを学んできたのではなかったか。

今回，それをとりあげたわけであるが，翻訳された文への不安があった。英語科，山田の協力を得て，原書から検討することとした。その側面から見た今回の試みについては，紙幅の関係で割愛せざるを得なかった。機会があれば，山田から報告が出されるであろう。

（川田・山田）

3 直面している諸問題……中間的な総括として

前章では，既に授業として実施ずみの授業案（1～3）と，これから実施予定の授業案（4～10）とを紹介した。(1)～(3)は前年度も試行され，本年度では2回目とあって，授業案自体も検討され，生徒達の感想などもとり入れて修正されてきたものである。(4)の“食物の歴史”からあとの授業案は，あくまでも“私案”であり，今後実施にあたって，まだまだ修正されて行かねばならないものである。したがって，(4)以後を含めた“実践篇のレポート”，本研究“ゆとりの時間を利用した総合学習”の全体的な総括は，再び次号においてということになるが，ここでは中間的な総括として，既に私達にとって明らかとなりつつある問題点を提示し，若干の考察を加えておきたい。

(1) “人間について考える”のテーマについて

全体テーマとして，私達は当初，“生物的存在としての人間－自分自身の理解のために－”をかかげていたはずであった。それは“人間を考える”ために用意されたいくつかのテーマ（他に，“社会的動物としての人間”，“Human Natureとは何か”，“自然と人間”，“Homo Faberとしての人間”，“「人が生まれる」ということ”の5つがあった）のうちから，選ばれたものであった。“生物的存在としての人間”が選ばれた経緯は，さほど全員に明確に意識されていたわけではなかったが，①生物の一員としての人間の占める地位（進化の問題，サルとの比較，生態系の問題などを通してうかび上がらせる），②生物的存在としての人間の身体への注目（性・生殖の問題，“食う”ことの意味，ロボットとの比較，病気・死の問題，逆に精神の働きと考えられるコトバの問題などを通してうかび上がらせる）を認識することの現代的意義からであったように思う。この当初の問題意識は，やや稀薄になったとは言えないだろうか。

それは，対象学年が中3であり，“生物的存在とし